

「資本論を読む会」便り

2021.3.18 No. 58

第3章 第3節 貨幣 c 世界貨幣 を終えました。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号(本文の字下げで数える)、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版)。

◆第59回

最近、資本論に関する本が出版されたり、E-テレの「100分で名著」という番組で資本論が取りあげられたり、資本論への関心が高まっているようです。社会が不安定化する中で、どう対処すべきか、そういう問題意識が広がっていると思われます。ただ、これらの議論の中で、社会主義という語が避けられる傾向があるようです。旧ソ連や中国などがそう呼ばれて来たからでしょうが、これらの国々は社会主義社会ではありません。既に読んだところにもありましたが、社会主義社会では生産物は商品となって現われたりしないからです。ですので紹介本で良しとせず、原典をしっかり読むことが大切ではないでしょうか。

さて、今回で、第1部 第1編 商品の全3章を終わります。第1章と第2章で、生産物の交換から商品が出現し、そこから貨幣が生まれ、金はその役を引き受けるようになったことを学びました。第3章で、商品流通に関わる貨幣の機能を見てきました。第1節は価値尺度としての機能、第2節は流通手段としての機能、第3節は貨幣の貨幣としての機能です。第3節の貨幣は、金の現物が必要な場面という位置づけです。

第1巻 第3章 貨幣または商品流通 第3節 貨幣 c 世界貨幣

【第1段落】(156) 国内流通部面から外に出るときには、貨幣は…

貨幣は、世界貨幣として地金形態に戻る

- (1) 貨幣は、国際流通の部面では、貴金属本来の地金形態にもどる。
(国内流通： 価格の度量基準、鑄貨、補助貨、価値章標などの機能)
- (2) 世界貿易では、諸商品はそれらの価値を普遍的に展開する。
∴ 諸商品に対してのそれらの独立の価値姿態も、世界貨幣として相対する。
- (3) 世界市場ではじめて貨幣は、十分な範囲にわたって、その現物形態が同時に抽象的人間労働の直接に社会的な実現形態である商品として、機能する。
貨幣の定在様式はその概念に適合したものになる。

世界貿易の部面では、何を買うにしても、例えば1万円札をどれだけ積み上げてでも買えません。世界では円は通用せず、何gかの金が必要になります。金であれば、どの国でも普遍的な価値として通用するからです。

議論は現代の貨幣制度から始まりました。

1929年の世界大恐慌の後に金本位制が崩壊し、第2次世界大戦後にIMF体制が発足して、金 1 トロイオンス(約31.103g) = 35 ドル で金に結びつく米ドルを基軸通貨とする固定為替相場制に移行しました。日本は1949年から1971年まで 1ドル=360円でした。1971年の米ドルの金交換停止により各国通貨と金の結びつきが断たれて、現在に至ります。結果、金は貨幣ではなくなった様相を呈していますから、金が世界貨幣だと言われてもどう理解したらいいのか疑問に思えます。

しかし、直接の兌換はないけれど、金の売買を通して円と金は結びついています。貿易の決済を金をもってすることは無くても、各国の中央銀行は外貨準備として外国為替とともに金を保有しています(日本は少ないが、アメリカは結構多い)。こうしたことから、現在でも金は貨幣ではないか、ということでした。

ところで、「……貨幣にかんする最も根本的な知識を……基礎にして、資本主義的生産の基本的な仕組みと信用制度についての研究を進めるなかで、貨幣についてもさらに具体的に知っていくことになる……。」(大谷禎之介:「貨幣の基礎」経済志林, Vol. 61, No.4, (1994))と言いますから、今後、外国為替や信用制度についても学んだ上で検討して行かねばならないようです。

【第2段落】 (157) 国内の流通部面ではただ一つの商品だけが…

世界市場では金と銀の二通りの価値尺度が支配する。

国内流通では、一つの商品だけが価値尺度として、貨幣として、役立っているが、世界市場では、二通りの価値尺度が存在する。

国によって、貨幣として役だっている商品は、金であったり銀であったりと異なっています。したがって世界市場ではこの両方が貨幣として役立つし、また、必要です。

しかし、生産方法の変革により銀は価値を低下させており、「銀は、世界市場においても、その貨幣資格をますます失うであろう。」と、注108のエンゲルス挿入部分にあります。実際、19世紀末には世界は金本位制に移りました。

【第3段落】 (157) 世界貨幣は、一般的支払手段、一般的購買手段、…

世界貨幣は、①一般的支払手段、②一般的購買手段、③富一般の絶対的社会的物質化、として機能

① 支払手段: 国際貸借の決済のために、他の機能に優越する。

(重商主義の標語「貿易差額!」の根拠)

② 購買手段: 主に、諸国間の物質代謝の従来の均衡が突然攪乱されるとき。

③ 富の絶対的社会的物質化:

一国から他国への富の移転が行なわれる場合で、

商品形態での移転が、商品市場の景気変動や所期の目的により排除されている場合。

まず、支払手段としての機能は、国際収支の差額を決済するために役立ちます。

重商主義のスローガンが「貿易差額！」なのは、輸出が輸入より多くて差額が大きければそれだけ金の支払いを受ける、ということでしょう。

次に「国際的な購買手段として役立つ」について。地域的形態を脱ぎ捨てているのですから、世界のどこでも通用するということでしょう。「突然の攪乱」とは何か、と質問がありましたが、レジュメで引用されている「経済学批判」の続きに、「さらにまた貴金属は、二国間の物質代謝の伝統的均衡が突然に破られると、たとえば不作のために一方の国が異常に大量に買わざるをえなくなると、すぐに国際的購買手段として機能する。」とあります。

最後に、富の絶対的に社会的な物質化として、購買でも支払でもなく、一国から他国への富の移転が行なわれる場合として、例えば日清戦争後の賠償金などが挙げられました。因みに、日本はこの賠償金によって金本位制に移行することができました。

【第4段落】 (158) 各国は、その国内流通のために準備金を必要…

世界貨幣の準備金としての蓄蔵貨幣

- (1) 各国は、世界市場流通のために、準備金を必要とする。(国内流通と同様)
- (2) 蓄蔵貨幣の機能は、
 - a. 一部は、国内の流通手段・支払手段としての貨幣の機能から生じる。
 - b. 一部は、世界貨幣としての貨幣の機能から生ずる。
- (3) 世界貨幣としての貨幣の機能から生ずる蓄蔵貨幣の機能のためには、現実の貨幣商品、生身の金銀(地金)が要求される。
(ジェームズ・スチュアートが、この金銀を、世界貨幣と呼んで特徴づけた。)

蓄蔵貨幣は、この節の a 貨幣蓄蔵 のところで出てきました。貨幣の流通量を調節するための準備金、支払手段の準備金として機能します。

さらに、前段落で見たような世界貨幣の機能を果すために、世界貨幣の準備金としての役割が課せられます。この場合、現物の金そのもの・金地金の形態で存在することが要求される、ということです。

ジェームズ・スチュアートについて質問がありましたが、アダム・スミスに先行する古典派経済学者です。資本論巻末の人名索引には、「サー・ジェームズ・デナム・スチュアート (1712～1780) イギリスの経済学者、重商主義の最後の代表者のひとり。貨幣数量説の反対者。」とあります。なお、主著は《経済学原理》全2巻 (1767)で、生産費価値説を主張したそうです(経済学小辞典)。

【第5段落】 (159) 金銀の流れの運動は二重のものである。…

金銀の流れの運動は二重のものである。

- ① 金銀原産国 → 世界市場 → 各国の流通部面
(各国の流通部面 a.国内通流水路 b.摩滅金銀鑄貨の補填 c.奢侈品 d.蓄蔵貨幣)

- ※ この運動は、商品に実現されている各国の労働と、金銀産出国の貴金属に実現されている労働との、直接的交換によって媒介されている。
- ② 金銀は各国の流通部面の間を絶えず往復している。
(為替相場の絶え間ない振動に伴う運動)

金銀の流れの運動は二重のものであるというのは、金で言えば、

① 産金国 ⇒ 非産金国

② 各国 ⇔ 各国

の二種類がある、ということです。

第3章 第2節 a 商品の変態 の第13段落に、「金の生産源」で「金は、直接的労働生産物として、同じ価値の別の労働生産物と交換される。」というくだりがありました。生産された金が流通に入ってくる話です。金の産地は限られているので、産金国から非産金国への流れが生じます。

第2の流れは、支払手段や購買手段などとして国家間で送金(文字通り)されるということです。

「為替相場の絶え間ない振動に伴う運動」について特に議論はなかったのですが、国際的な取引では為替が用いられ国際収支は為替相場にも依存するので、そういうことを言っているのだろーと考えました。資本論 第3巻 第5篇 第35章 貴金属と為替相場 でいろいろと論じられています。

【第6段落】 (160) ブルジョア的生産の発展している諸国は、…

ブルジョア的生産の発展は、蓄蔵貨幣を必要最小限に制限する。

- (1) ブルジョア的生産の発展している諸国は、銀行に蓄積される蓄蔵貨幣を、その独自な諸機能に必要な最小限に制限する。
- (2) 蓄蔵貨幣が平均水準を大きく超えるということは、商品流通の停滞または商品変態の流れの中断を暗示する。(多少の例外はある)

上記(1)について、誰がそうするのかという質問がありました。自然とそうなる、ということでしたが、そうなるメカニズムがよく分かりません。

レジュメでは、第3部 第5篇 第35章 から、次の引用がありました。

「1) 国際的支払いのための準備ファンド、つまり世界貨幣の準備ファンド。2) 膨張したり収縮したりする国内貨幣流通の準備ファンド。3) 銀行業と関連するものであって、貨幣のたんなる貨幣としての諸機能とはなにも関係のないもの、すなわち銀行券の兌換性のためと預金のための準備ファンド。」など。

金が増産されたとか、海外から流入したということがあっても、銀行はこれだけの量しか持たないということなのでしょう。

「資本論を読む会」便り

2021.10.11 No. 59

第60回例会は3月でした。新型コロナの感染拡大のため、結局、半年も例会を中止しました。ワクチン接種も進み、第5波の緊急事態宣言も解除されましたので、どうやら再開できそうです。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。原文は「資本論」を参照して下さい。

◆第60回 第1巻 第1篇(全3章)の復習

今回の報告に対して「キーワードで整理してほしかった」という声がありました。そこで、報告や議論で話題になった事を、項目を立ててまとめてみました。なお、必ずしも議論の順ではありません。

第1章 第1節～第3節

●資本論の意図

- ・社会は成長し発展します。この必然性を理解することが科学と言えるでしょう。
- ・「…社会がその運動の自然法則を探りだしたとしても、——そして近代社会の経済的運動法則を明らかにすることはこの著作の最終目的でもある——、その社会は自然的な発展の諸段階を跳び越えることも法令で取り除くこともできない。しかし、その社会は、分娩の苦痛を短くし緩和することはできるのである。」(第1版序文)

●商品

- ・「資本主義…社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。」
- ・「富」。広辞苑には、物が豊かにあること、とあります。この「物」は、人の役に立つ「物」、つまり使用価値です。
- ・第1節で扱っている商品について、これはどういう性格の商品なのかがこれまで議論になっていて、「冒頭商品」と言われています。
 - 超歴史的商品 (古代から現代までの全部の商品)
 - 抽象的商品
 - 資本主義社会以前の歴史的な単純な商品
 - 資本家的商品など、いろいろな解釈があります。
- ・「資本主義社会の富は…」とあるので、文章通りに理解すれば、現代の資本主義社会に見られる商品を分析の対象としているようです。

しかし、金融商品のような「商品」は、ここでの商品には含まれていません。資本主

義社会の単純な商品と言え良いでしょうか。

- ・商品は現代になって急に現われたものではなく、古代社会で発生して今日まで発展してきた歴史的な所産です。ですから、アリストテレスの時代やその他の時代の商品がいろいろと引き合いに出されたりしています。

●使用価値 「ある一つの物の有用性は、その物を使用価値にする。」

「商品体そのものが使用価値である。」

- ・「～は価値である」という言い方には違和感があります。価値という語は、普通、「～には価値がある」とか「～は価値を持つ」という言い方をするからです。「～は使用価値を持つ」と言っても良いと思います。
- ・河上肇:「資本論入門」(青木文庫, 第1分冊, p.124) に、次のような説明がありました。
「『ある物の有用性、すなはち人間の何等かの種類の欲望を充たすその属性は、その物を使用価値たらしめる。』こゝに云々の物は使用価値を有つといはずに、云々の物は使用価値であるといつてあるのは、注意を要する。ベイリーの『ヘーゲルの論理学』には『ヘーゲルにとっては、理性が心そのものである、……心が理性を有つのではない、それは理性である』と説明してあるが、丁度それと同じやうに、マルクスは或る物はその有用性のゆゑに使用価値であると言ふのである。例へば時計といふ一の Goods (財) があつて、それが時計から離れて存在するところの或る効用を有つてゐるといふわけではない。私と時計とは違った存在物だ、だから私は時計を持てゐる。しかしさういふ風に、時計が時計以外に存在する或る効用を有つてゐるのではない。『鐵、小麥、ダイヤモンド、等々の如き商品體そのものが、一の使用価値すなはち財』である。」
- ・物の有用性を使用価値と言っているのではなく、有用性を持つ物を使用価値と言っています。

●交換価値と価値

- ・この二つは区別されなければなりません。
- ・1クォーターの小麦が、 x 量の靴墨、 y 量の絹、 z 量の金、などと交換されるとき、
 x 量の靴墨
 y 量の絹
 z 量の金
を、それぞれ、1クォーターの小麦の交換価値、と呼んでいます。
- ・靴墨、絹、金、などの異なる使用価値が、小麦と交換可能であるという同一の性質を持っています。このことから、これらの商品は互いに見かけは違っていても或る同一の質を持っていると結論されます。これを価値と呼びます。
- ・交換価値には分量があることから、価値も大小比較できる性質であること、つまり量であることが分かります。
- ・1クォーターの小麦の価値は小麦を見ても判りませんが、 x 量の靴墨が1クォーターの小麦の交換価値である場合、 x 量の靴墨は1クォーターの小麦の価値を表わしていると言えます。 y 量の絹、 z 量の金、でも同じことが言えます。
交換価値は価値の現象形態なのです。

●内的に持つ価値、商品に内在する価値

- ・商品が交換されるのは、互いに異なる物だからです。同じ使用価値であれば、交換の必要がありません。
- ・しかし、交換される商品は、価値という共通の性質をその内部に持ち、等量です。
- ・「だが吾々はこのこと(商品が種々の交換価値を持つこと)から、交換価値は『かくの如き種々なる表現の仕方と區別されうる或る内容を有たねばならぬ』といふことを推理しうるのである。同じものが或いは雲となり雨となり或いは雪となり氷となるといふのであれば、これらのものは雲でもなく雨でもなく、すなわちそれ自身とは區別されるところの、或る内容を有たねばならぬ。かくて吾々は先ず、交換価値なる現象形態と區別されるところの、或る内容に考へ到つた。次に吾々は、その内容が何であるかの論究に進む。」(河上肇:「資本論入門」, 青木文庫, 第1分冊, p.137~8)
- ・商品の価値は、商品を生産する人間労働に由来します。

●価値の「発生」

- ・採取や狩猟によって得たものも、作ったものも、役に立つものは使用価値です。しかし、自分や自分たちで使う限り、価値ではありません。
- ・これらの使用価値が交換されるようになると、つまり商品になると、新たな性質＝価値を持つようになるのですが、ここが少し解りにくいところです。
- ・偶然的、局地的にしか交換が行なわれない社会では、商品の価値の実体である社会的平均労働といってもあまりはつきりしないように思えます。価値というのがはつきりするには商品生産がどれくらい発展すれば良いのか、ということも気になります。
- ・しかし、われわれの分析の対象である商品生産社会では平均労働の意味ははつきりしますから、気にしなくても良いのかもしれません。

●使用価値の捨象と有用労働の捨象

- ・使用価値を生み出すのが有用労働ですから、使用価値を捨象するということは、有用労働を捨象することにほかなりません。

●抽象的人間労働

- ・「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成する…。…、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を生産する…。」(資本論本文)
- ・「生理学的意味での人間労働力の支出」というのはどんな労働にも当てはまるでしょう。
- ・「この同等な人間労働または抽象的人間労働」は「生理学的意味での人間労働力の支出」を指していると思われます。
- ・商品生産労働においてこの抽象的人間労働が価値を形成する、と読めます。
- ・「人間労働力の支出」とは要するに労働することです。「生理学的意味での」という修飾語は、具体的に何を作っているかを問わないということです。

●商品に表わされた労働の二重性

- ・商品の使用価値 …… 具体的有用労働 を表わしています。
- 商品の価値 …… 抽象的人間労働 を表わしています。

●価値に含まれる労働、労働力の支出、価値の実体

- ・レジュメの「価値に含まれる労働」という表現について質問があり、「労働力の支出」のことだ、と回答がありました。
- ・これに対し、「価値の『実体』というべきだ」という意見がありました。

●価値形態、貨幣形態、価格形態

- ・1クォーターの小麦が、例えば x 量の靴墨と交換できる、という状態にあるとします。このとき小麦は価値を持っています。小麦が台所にあれば単なる使用価値ですが、今は価値を持っているので、価値の姿をしている(価値形態にある)、と言えます。
- ・この例では、靴墨という単純な商品で小麦の価値を表わしているので、単純な価値形態ということになります。
- ・あらゆる商品(金を除く)が、金で価値を表わす状態にあるとき、この価値形態を貨幣形態と言います。(歴史的には銅や銀の場合もありました。)
- ・このとき、個々の商品について見れば単純な価値形態と同じ形になっていて、これを価格形態と言います。

●人間の平等

- ・アメリカ合衆国の独立宣言は人間の平等について語っているが、人間の平等の観念は長い歴史があって生まれてきた、という発言がありました。「われわれは、次の真理を自明なものと認める。すべての人は平等に創られていること。……」(独立宣言。1776年)というくだりのことかと思います。
- ・これは第3節に出てくる、アリストテレスは商品の同等性を認識していたがその根拠を見出すことができなかった、という話に関連しています。当時は奴隷制の社会であって商品生産は未発達で、同等な人間労働というのはまだ一般的ではなく、アリストテレスといえども価値表現の秘密を解くことはできなかった、という話です。
- ・この箇所ではマルクスは「価値表現の秘密、すなわち人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめてその謎を解かれることができるのである。しかし、そのようなことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた商品所有者としての人間相互の関係が支配的な社会的関係であるような社会において、はじめて可能なのである。」と述べています。
- ・つまり、商品生産が一般的に行なわれる社会の出現が、人間の同等性の概念を強固なものにするということです。ですから長い歴史が必要だった訳です。
自由・平等・民主主義等の観念は、商品生産社会の出現によって生まれました。

※ 第1篇全3章を復習する予定でしたが、第1章でいろいろと議論になり、あまり進みませんでした。復習は追い追いつくこととして、次回から 第2篇に進みます。

※ 「便り」を編集する中で、「価値」や「抽象的人間労働」について編集人はまだあやふやに理解していることを痛感しました。おかしな記述があれば例会でご指摘下さい。

「資本論を読む会」便り

2021.11.17 No. 60

先月は久々の例会となりました。その前は3月でしたので、結局半年も中止したことになります。新型コロナ、第6波は来ずにこのまま収束すると良いのですが。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。段落番号は「資本論」本文の字下げで数えています(大月書店、全集版)。

◆第61回 第1巻 第2篇 第4章 貨幣の資本への転化 第1節 資本の一般的定式

今回はこの節の最初から中ほどの第15段落までを検討しました。レジュメ・報告・議論を元に、内容をまとめて行きます。

●この章の課題

- ・資本論第1巻(=第1部)は資本の生産過程の分析が課題です。その第1篇 商品と貨幣 (第1章 商品、第2章 商品の交換過程、第3章 貨幣または商品流通)では、商品と貨幣が取りあがられ、商品交換の法則、商品の価値形態、貨幣の必然性、貨幣の諸機能の発展が明らかにされました。
- ・第2編は1章しかありませんが、貨幣は如何にして資本となりうるのかが示されます。

●第1節 資本の一般的定式

第1段落

貨幣は商品流通の中で生まれた。資本の出発点は商品流通である。商品生産と商品流通の発展は、資本が成立するための歴史的な前提となる。

- ・議論の中で、貨幣がなければ資本はない、ということが言われました。また、商業資本は資本の原始的な姿だ、という指摘もありました。

第2段落

資本は、貨幣・商品・生産手段など様々な現象形態を持つが、最初の現象形態は貨幣である。

第3段落

歴史的にみると、最初、資本は、土地所有に対し貨幣の形で、貨幣財産として・商人資本や高利資本として相対して来た。しかし現在でも、どの新たな資本も最初は市場(商品市場、労働市場、貨幣市場)に貨幣として、日々出現している。

第4段落

「貨幣としての貨幣」と「資本として貨幣」との最初の区別は、流通形態の相違にある

第5段落

商品流通の二つの形態

買うために売る $W-G-W$

売るために買う $G-W-G$

のうち、後の方の貨幣の流通形態は、資本に転化する。すなわち、高く売るために安く買う。

- ・ここは、商品流通 $W-G-W$ の他に、 $G-W-G$ という流通が区別される、ということです。
- ・ $W-G-W$ は、 $W-G$ と $G-W$ という二つの段階から成っています。そこで、この順序を逆にした $G-W-G$ という新たな流通を作って、これを分析しようとしているようにも見えます。しかしそういう恣意的なことではなく、現実には、(抽象的な形で表現すると) $G-W-G$ という流通があるので、これを分析しようとしているわけです。
- ・これら二つの形態は、目的が異なります。

第6段落

$G-W-G$ は 第1の段階 $G-W$ (買い) と 第2の段階 $W-G$ (売り) の二つの段階の統一であり、総運動であるが、結局は、貨幣と貨幣の交換 $G-G$ である。

商人は、綿花を100ポンドで購入し110ポンドで販売するが、これは、等価物交換という単純流通の枠を超える。

つまり、 $G-W-G$ は、単純流通でありながらすでに単純流通ではない。

- ・ここから、 $G-W-G$ の分析です。この流通は、煎じ詰めると $G-G$ となるので、単純流通つまり等価物交換である限り矛盾です。ですが、実際には綿花の購入・販売の例のようなことが、つまり貨幣の量的相違が起こります。

第7段落

循環 $G-W-G$ は、二つのGが等しいのであれば全くの無内容である。したがって、単純な商品流通 $W-G-W$ とはまったく種類が違い、貨幣は一つの特有な独自な運動を描く。

以下、循環 $G-W-G$ と $W-G-W$ の形態的相違を特徴づけ、その背後にある内容的相違を探る。

第8段落

○二つの循環 $G-W-G$ と $W-G-W$ の共通点

◆どちらも、同じ二つの段階 $W-G$ (売り) と $G-W$ (買い) に分かれる。

二つの段階のどちらも、商品と貨幣 という同じ二つの物的要素が相対し、
買い手と売り手 という同じ経済的仮面をつけた二人が相対する。

◆どちらも、同じ反対の諸段階(売りと買い)の統一である。

どちらも、この統一は三人の当事者の登場により媒介される。

一人は売るだけ。一人は買うだけ。第三の一人は買いと売りとを交互に行う。

第9段落

○二つの循環 $W-G-W$ と $G-W-G$ は、流通段階が逆になっている。

$W-G-W$ 売りで始まり買いで終わる。貨幣は商品に転化。商品は使用価値となる。

運動の出発点は商品

貨幣が全過程を媒介する。(買うために売る)

運動の出発点と終点は共に商品。

$G-W-G$ 買いで始まり売りで終わる。買い手が貨幣を支出、売り手として貨幣を取得。

運動の出発点は貨幣

商品が全過程を媒介する。(売るために買う)

運動の出発点と終点が共に貨幣。運動の結果が同時に出発点として現れる。

第10段落

○二つの循環 $W-G-W$ と $G-W-G$ で、貨幣の役割が異なる。

W_1-G-W_2 貨幣は商品 W_2 に転化。この商品は使用価値として役立つ

G_1-W-G_2 G_1 の支出は G_2 を取得するため。

貨幣を得るための貨幣の支出を前貸しという。(注3)

- ・添字「₁」「₂」は、ここに出てくる W や G を区別するために報告者が付けたものです。
- ・編集人は、「貨幣の支出を前貸しという」の「貨幣の支出」とは、 G_1 で W を購入することか、あるいは G_1 を用意することか、と少し迷いました。ですが、議論の中で、「前貸し」の語は、長谷部訳資本論では「投下」となっている、と紹介されたのを聞いて、 G_1 を用意することだろうと理解しました。
- ・単純な商品流通と違って、 $G-W-G$ は貨幣の取得が目的です。
- ・イスラム法では金貸し(利息)を認めないという話が紹介されました。キリスト教も元来は同様です。しかし何れの社会も、歴史的には現実的に対応してきたようです。

第11段落

○二つの循環 $W-G-W$ と $G-W-G$ では場所変換するものが異なる。

一方は貨幣、他方は商品である。

$W-G-W$ 同じ貨幣片が二度場所を変える。

商品と引き換えに貨幣を手に入れ、商品と引き換えに貨幣を手放す。

貨幣を一方の持ち手から他方の持ち手に最終的に移す。

$G-W-G$ 同じ商品が二度場所を変える。

買い手は、商品を売り手から受け取り、別の買い手に売り渡す。

貨幣を最初の出発点に還流させる。

- ・単純流通では貨幣 G は遠ざかるが、 $G-W-G$ では、貨幣は還流して来ます。

第12段落

貨幣の還流とは、買われた商品が再び売られて貨幣が戻ってくることである。貨幣量の変

化は問題ではない。

資本としての貨幣の還流は、単純流通における貨幣の還流とは異なる。

- ・単純流通における貨幣の還流については、次の第13段落で説明されています。

第13段落

○二つの循環 $W-G-W$ と $G-W-G$ における貨幣の支出と貨幣の還流

$W-G-W$ 貨幣の還流は、第一の取引の結果ではなく、次の商品の販売結果による。

$G-W$ (買う) という貨幣の支出と、貨幣の還流は全く関係がない。

$G-W-G$ 貨幣の還流は、売のために買った W (貨幣を支出した)を売ることによる。

もし貨幣の還流がないとすれば、 W が売れていないのが原因。

- ・ $W-G-W$ で貨幣の還流と言っているのは、この循環とは別の第二の取引 $W-G-W$ の第1段階で、商品売って取得する貨幣のことを言っています。ですから、第一の取引とは関係がありません。
- ・この段落の後半は恐慌論への布石となっているようだ、という指摘がありました。

第14段落

○二つの循環 $W-G-W$ と $G-W-G$ の目的の相違

$W-G-W$ 商品から出発し、別の商品で終わる。

循環の最終目的は、使用価値。その消費あるいは欲望充足である。

$G-W-G$ 貨幣で始まり貨幣で終わる。貨幣を支出し、貨幣を回収する。

循環を起動する動機・目的は、交換価値そのものである。

- ・ $G-W-G$ の目的について、貨幣を言いかえて「交換価値そのもの」と言っています。

第15段落

単純な商品流通 $W-G-W$

両方の極は同じ経済的形態、商品である。価値は等しいが、使用価値は異なる。

この運動の内容は生産物の交換であり、社会的労働が体现されている素材の変換(社会的物質代謝)である。

資本としての貨幣の流通 $G-W-G$

両方の極は同じ経済的形態、貨幣である。質的に異なる使用価値ではない。

貨幣を貨幣と交換しただけで、馬鹿げた、無目的で無意味な操作、にしか見えない。

貨幣の区別は大きさの相違だけだから、両方の極の量的な相違に意味がある。

故に、前貸し貨幣額より多くの貨幣額が流通から引き上げられなければならない。

資本としての貨幣の流通を $G-W-G'$ と表示する。但し、 $G' = G + \Delta G$

増加分(超過分) $\Delta G = G' - G$ を剰余価値と呼ぶ。

資本としての貨幣の流通は、その中で、剰余価値を付け加え、価値増殖する。

このような運動が、価値を資本に転化させる。

- ・資本とは価値が発展したもの、ということになりました。資本としての貨幣は、資本の現象形態です(第2段落)。

「資本論を読む会」便り

2021.12.19 No. 61

前回10月は久々の例会となりました。その前は3月でしたので、結局半年も中止したことになります。今回11月も開けましたが、新型コロナ、第6波は来ずにこのまま収束することを願っています。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。段落番号は「資本論」本文の字下げで数えています(大月書店、全集版)。

◆第62回 第1巻 第2篇 第4章 貨幣の資本への転化 第1節 資本の一般的定式 (続き)

前回の例会では、第1節の前半を読みました。その内容は、大略、

貨幣としての貨幣と資本としての貨幣の流通形態の相違を考察する。

資本としての貨幣の流通を完全な形で表すなら、 $G-W-G'$ となる。

資本としての貨幣の流通では、前貸しされた価値は自分の価値量を変え、剰余価値を付け加える。また、この運動そのものが、価値を資本に転化させる。
ということだったと思います。

今回11月の例会では、第1節後半を読み終わりました。

●第1節 資本の一般的定式

第16段落

○ $W-G-W$

両極の商品の価値が不等価であっても(この形態においては偶然的)、無意味ではない。

両極の商品の価値が等価であることは、この流通形態の正常な経過の条件。

この流通形態の目的は、両極が(使用価値の)異なる商品であること。

○ $G-W-G$

両極のGが同じ価値量であれば、無意味である。

第17段落

○ $W-G-W$

この過程の反復は、過程の外にある消費(使用価値の取得、欲望の充足)が最終目的。

消費が目的だから、反復には限度がある。

○ $G-W-G$ 、 $G-W-G'$

Gが $G'=G+\Delta G$ になっても、同じく貨幣であり、この過程は自己目的。

終点の貨幣は価値増殖過程開始に適した形態で、再び出発点となり、繰り返しが可能。

価値の増殖は絶えず更新される運動の中にだけ存在。故に、資本の運動は無限。

終点の貨幣を消費にあてたり流通から引きあげると(貨幣蓄蔵)、資本ではなくなる。

- ・ $G-W-G'$ の過程を「自己目的」というのは、終点が出発点と同じく貨幣だからです。商品流通の場合は、終点も出発点も商品ですが、使用価値が異なるので、同じ商品ではありません。貨幣は、量が異なっても、貨幣としては同じものです。
- ・ 価値の増殖は何故「運動の中にだけ」存在するのかという質問がありました。蓄蔵貨幣など単に存在するだけの貨幣は増殖しません。価値が増殖させるには、 $G-W-G$ という過程を経ることが必要です。この事を言っていると思います。

第18段落

○自己増殖を目的とする $G-W-G$ の運動の意識的な担い手として貨幣所持者は資本家になる。

価値の増殖(流通 $G-W-G$ の客観的内容)が、資本家の主観的目的となる。

使用価値も、個々の利得も、資本家の直接的目的ではない。

利得することの休みのない運動のみが資本家の直接的目的。

貨幣を絶えず繰り返して流通に投入して、絶対的な富としての貨幣の増殖の実現する。

(貨幣蓄蔵者は、貨幣を流通から引き上げることによって、富を集積する。)

- ・ 資本の人格化に関して、レポーターから序文の一節が紹介されました。
「人が問題にされるのは、ただ、人が経済的諸範疇の人格化であり、一定の階級関係や利害関係の担い手である限りのこと。」
- ・ この段落では資本と貨幣蓄蔵とが比較されています。富の集積方法を比較して、資本の概念を、一層はっきりさせるためだと思います。
- ・ マルクスは、貨幣を流通に投じて貨幣の増殖を図る方法を合理的、貨幣を流通から引き上げて富を蓄積する貨幣蓄蔵者の方法を不合理、と、言っています。
これとの関連で、企業の内部留保の増加は資本の健全性の低下であるとする指摘がありました。内部留保が貨幣蓄蔵であればそういうことだろうと思います。
なお、鈴木絢子(国立国会図書館 調査及び立法考査局経済産業課)によれば、「内部留保は設備投資等の原資と見なすこともでき、一概にその額だけを見て過剰と見なすことはできない。ただし、投資等に充てられることなく保有されている現預金の多寡は、資本効率性の観点から問題となり得る。」(国立国会図書館: 企業の内部留保をめぐる議論, 調査と情報 —ISSUE BRIEF— NUMBER 836 (2014.11.11)) とのことです。

第19段落

○ $W-G-W$

価値は、最初は商品形態、次に貨幣形態、再び商品形態となる。

商品は流通から出て、価値も消える。貨幣も、運動の最後の結果では、消えている。

○ G—W—G

商品も貨幣も、価値がとる別々の存在形態として機能している。

貨幣は価値の一般的な存在形態。商品は価値の特殊な存在形態である。

いわば価値の仮装しただけの一時的な存在形態として機能しているだけである。

この過程で、価値は消えない。

価値は、絶えず一方の形態から他の形態に移行し、これを繰り返して増大していく、一つの自動的な主体に、転化する。すなわち、自己増殖する価値となる。

○ 価値の現象形態を固定すると資本の運動の連続性を見失う。

「資本は貨幣である」、「資本は商品である」、とするのは一面的。

- ・「資本は貨幣である」「資本は商品である」といった言明について、河上肇は「何が何のためにかかる現象形態をとるのか、ということをはっきりと示していない。」(「資本論入門」)と指摘しています。
- ・「自動的な主体」というのが分かりにくいのですが、自ら動くとか、自ら運動すると言い換えると分かるような気がします。で、何が運動するのかの「何」が「主体」です。運動するという述語の主語と考えたら良いようです。要するに、価値が G—W—G という運動をする、ということです。
- ・レジュメに「神秘的」という語があり、どういう意味かと質問がありました。資本論の「価値は、それが価値であるがゆえに価値を生むという、神秘的な資質を受け取った。」という文の「神秘的」です。
- ・この第1節では、資本は自己増殖する価値であることを明らかにしていますが、何故、どうやって増殖するのかを明らかにしていません。歯がゆい感じもしますが、この第1節で問題の所在を明らかにし、次の第2節で問題を正確に把握し、そして第3節でこれを解くという手順のようです。

第20段落

○ 資本になった価値は、貨幣・商品と形態を変えながら、自分自身を維持・拡大させる。

○ 貨幣形態

資本になった価値が、自分自身の増殖を確認する独立した形態。

(貨幣は、質的に同一で、量的に比較可能)

貨幣は、価値の増殖運動の出発点(例えば100円)・終結点(例えば110円)となる。

○ 商品形態

価値は、商品形態をとることなしには資本にはならない。故に、貨幣蓄蔵はされない。

商品は貨幣をより多くの貨幣にするための手段である。

第21段落

- 単純な商品流通では、
価値は、商品の使用価値に相對して、貨幣という自立した形態を受け取るだけ。
- 資本としての価値の運動では、
価値は、自ら運動する実体として現れる。
商品と貨幣は、価値の単なる二つの形態に過ぎない。
価値は商品關係を表すかわりに、自分自身で自分を比較する關係に入る。
前貸しされた100£は、10£の剰余価値によってのみ資本になる。
資本になると、100£と10£の區別は再び消え失せ、一つのもの110£になる。
つまり、最初の100£も最後の110£も、どちらも資本という名の価値であって、
前の自分と後の自分を比較している。

- ・価値が自分で自分を比較する關係について、マルクスはこれを「私的な關係」と表現しています。運動の前後の自分を自分と比較するのであって、他者が入らないからです。
- ・上記要約では省略しましたが、資本論本文では、 $G\ 100\text{£}$ 、剰余価値 $\Delta G\ 10\text{£}$ 、 $G'\ 110\text{£}$ の關係について、キリスト教の三位一體説を踏まえた説明がされています。イエス(子)は神(父)の子で人々を導いたが、昇天した後は聖靈が人々を導きます。しかしこの3者は実は一體なのだそうです。話がややこしいので深入りは避けます。

第22段落

- 価値は、自ら運動する主体・生きた実体となり、過程を進みつつある価値・貨幣となり、資本になる。
- 資本は、流通から出てきて再び流通に入り、流通のなかで自分を維持し・増大し流通から戻る。この循環を絶えず繰り返す、また新しく同じ回転を始める。
- $G-G'$ 貨幣を生む貨幣
これは重商主義者達(資本の最初の代弁者)の語った資本の記述である。
自己増殖する貨幣を意味する。資本をもっとも直接的に表現したもの。

第23段落

- $G-W-G'$
商人資本だけに特有な資本の運動形態であるかのように見える。
しかし、産業資本にも妥当する。生産過程は流通部面の外で行われる。
利子生み資本にも妥当する。但し短縮形の $G-G'$ で現れる。

第24段落

- $G-W-G'$ は、直接に流通部面に現われているとおりの資本の一般的定式。

(第1節 終わり)